

# 中学校音楽授業におけるゴスペル・ソングの教材化についての研究

—新しい合唱指導への提案—

教科・領域教育専攻

芸術コース（音楽）

佐藤 孝子

## 1. 研究の背景および目的

中学校音楽科にとって合唱は、重要な活動で

あり、また校内合唱コンクールなど主要な学行事の一つとして大きな位置を占めている。しかし、ほとんどの学生は卒業後、合唱活動から離れていく。この事実は、生徒にとって学校の音楽が生活とは相容れないことを物語っている。

そこで現在ブームであるゴスペル歌唱活動に注目し、コーラスを楽しむ成人の姿から、「何故歌うのか」という「歌うこと」の本質を探り、そこから学校音楽の問題点を明らかにし、解決の方法を探ろうと考えた。その歌唱活動の過程の中に、行き詰まりを迎えていく学校合唱教育への突破口を見出す手がかりが見つけられるのではないか。

ゴスペル・ソングを用いた授業実践を通して、合唱に対する価値観の変換の必要性を学校教育に向けて提案していくことを、本研究の目的とする。

研究は、まず筆者自身はその活動の中に身を置いた体験や体感を通して、従来の合唱教育とゴスペル歌唱活動の違いを明らかにし、そこでの活動を学校に取り込む場合を想定しながら、その可能性について検討をしていく。最後に実際に中学校において授業実践を行い、その有効性についての検証を行う。

## 2. 論文の構成

第3章 学校教育におけるゴスペル歌唱活動の

序章 研究の目的・先行研究について  
校

第1章 ゴスペルの歴史と特徴

第2章 日本におけるゴスペル歌唱活動の展開  
適応の可能性

第4章 中学校3年生選択音楽による授業実践

終章 まとめと今後の課題

## 3. 論文の概要

### 3.1. 第1章

アフリカ系アメリカ人の奴隷や人種差別による痛苦の歴史の中で、唯一の救いとして存在したキリスト信仰を支えてきた魂の歌「ゴスペル」その成立の過程を奴隷解放前後と戦後の3つの区分に分けてまとめた。すべてのブラック・ミュージックの根幹をなす黒人霊歌ニグロ・スピリチュアルの成立の背景とそれが時代の変化によりゴスペルへと移行していく変遷のなかで、その根底に流れる精神性を汲み取った。

次に、アフリカの文化的遺産としての要素を踏まえながら、音楽的な特徴を、1.リズム、2.コール・アンド・レスポンス、3.ブルー・ノート、4.即興性、5.ボディー・アクションの5つの要素に分けてまとめていく。それらには、神を賛美するための彼らの美学が詰まっていること、また彼らの識字率の低さこそが、口頭伝承を不可欠なものとし、これらの独特な音楽を保持することを可能にしたことが理解できた。

### 3.2. 第2章

ゴスペルが日本にどう伝わり、変容し、展開しているのか、亀淵友香、ラニー・ラッカー、川上盾の日本を代表する3人のゴスペル指導者によるワークショップへ参加し調査した。それにより、宗教との関わり方によって習得の方法や曲作りのためのコンセプトが異なっていることがわかった。「宗教としてのゴスペル」と「日本における音楽スタイルとしてのゴスペル」の2つが存在し、目的に応じて求められていた。

また2度の訪米で、教会の視察やワークショップの体験を行い、そこでも習得方法などの違いを認識したが、ゴスペルにおいて何よりも重要なのは技術よりも<sup>フィニッシュ</sup>精神であるという基盤に降り立ち、やはりスタイルだけで歌うことはできないということを理解した。

日本におけるゴスペル活動参加者の声を拾っていくと、そのきっかけは様々であっても、歌唱を通じて、何らかの内面の変化を迎え、それが歌うことの支えとなり、継続していくことがわかっていった。宗教的な基盤をもたない日本人にとってゴスペルを通じて精神の豊かさや人間同士のつながりなど、心の拠り所を得ているという背景が浮き彫りになってきた。

### 3.3. 第3章

実際にゴスペル歌唱活動と学校教育を重ねて考察した。会津にある「子どもゴスペル合唱団(ACC)」の活動を調査し、学校教育との違いを子どもたちと指導者へのインタビューを通し明らかにした。子どもたちが、学校の授業よりACCでの活動に楽しさを感じている要因として「身体表現を伴うこと」「拘束されず自由なこと」「教科書の曲にはない魅力」「仲間同士のつながり」などが挙げられた。指導者は、知識や技術ではない身体や感覚の重視や人間としての成長を最重要と捕え、子供の自主性や可能性を

信頼した活動が行われていた。学校教育ではタブーとされている「楽譜を用いない」「身体表現」「頭声でない声」「さわやかでない歌詞」というキーワードこそが、合唱教育の行き詰まりを打破する鍵に成り得ることについて、それぞれの考えを示した。また宗教音楽を学校で扱うことについて、法規上の問題点や、道徳との関連から見解を示した。

### 3.4. 第4章

「1時間内で歌える」「楽譜を用いない」「身体表現をつける」のコンセプトのもと、大和中学校3年生の選択授業で6時間のゴスペル・ソングを用いた授業を实践し、生徒たち自身に評価をしてもらった。その結果、ACCの子どもたちと同様の回答が集まり、ほぼ全員がゴスペルならば、卒業後も歌い続けていきたいと述べ、極めて有意義であることが実証された。

### 3.5. 終章

学校教育に向けて「身体で音楽を感じる」「子ども扱いでは感じられない」「一つの技を身につける」「個も集団も充たす」「教師自身のリアリティ」の5つの提案を行った。これらは本名のレベルで、身体が気持ちよく感じて歌うこと、模倣と繰り返して身体に一つの技を身につけること、教師自身が自分のリアリティをもって身体で音楽を表現するといった、身体と音楽との重要な関係性である。ゴスペル・ソングを介して、教師と生徒が身体のコミュニケーションを取り合ったのである。これらのことより、身体の原初的な快適さを等閑視した合唱は、いつの日にか行き詰まりを向かえていくと考えた。

今後、集団のまとまりや美しさのためだけでなく、個人の楽しさ、気持ちよさも充たし得る合唱の価値が容認される合唱教育を、ゴスペル歌唱活動を通して呼びかけていきたい。

指導教官 小川 昌文